

総合的な学習における「飼育」の指導計画

西東京市立保谷第2小学校

年間教育計画作成について

西東京市立保谷第二小学校では平成15年度より「飼育活動」を4年生の総合の学習に位置づけ指導してきた。

学校は、3年目の今年、飼育指導案を作成したので、次ページに掲載するのでごらんいただきたい。

(1) 保護者への説明と支援

校長と担任は、毎年春の保護者会で目的と方法を示して飼育活動を説明し、休日の世話への支援を求めている。そのため多くの親子が会話を大事にしながらかかわっている。

(3) 飼育活動の効果・子どもの作文から

3月末に4年生の企画で新4年生への飼育の引き継ぎが行われる。ここで4年生は動物の性格や世話のし方を説明し、ふれあい指導と質問に答える。昨年度の質問「動物を踏んだらどうするか？」答「まずけががないかチェックしてください。けがが無ければそのまま大丈夫です。・・・なるべく踏まないようにしてください」「緊急の場合は、すぐに先生に知らせて下さい」。また「ウサギが暴れたらどうするか？」との問いに「夜行性ですから暴れません。でも暴れたらやさしく抱いてあげて、安心させればおとなしくなります」「ウサギのチャメは年とって目が見えないから、静かに優しく世話して下さい」などと4年生は体験を元に頭と心から出た言葉で的確に答えていた(参照P38)。これへの4年生の感想文を紹介する。情をともなう冷静な動物との関わりから、友達を見つめ、そのことで自分を見つめるなど、愛情を感じて潔癖症を克服するなど、飼育活動が十分に情感を養っていることが現れている。

作文「大切な命のバトンをわたそう！」

「4年生は、自分の係の場所へ行ってください。」先生の合図で、みんな動き出した。私はラバの担当だった。ラバは人気があって、たくさんの3年生が並んだ。その3年生の顔を見ると、ワクワクした顔や、少し緊張して固くなった顔もあった。だけど、ラバを抱くとみんなにこにこ顔！ラバを抱いた後に感想を聞くと、「温かかった。」「毛がフサフサして、気持ちよかった。」などです。なかには横で見ている

だけの子もいたので、「なでてみたら？」と声をかけた。少し遠慮気味にやさしくラバをなでた3年生を見ると、去年の私を思い出した。

私も3年生の頃は、ウサギが少しこわかった。でも、いまではだっこだってできる。

私は飼育を通して、私のいろんなところが変わったと思う。まず、飼育小屋のにおいだ。最初の1ヶ月は、もう臭くてたまらなかった。しかし、今では慣れたというか、飼育小屋の中も外もたいして変わらないように思えてきたのです。

それに獣医師の先生が、私たちによく言う「チャボやウサギはしゃべれないから、よくみてあげてね。」私はそれを実行してみたのです。するとどうでしょう、本当に気持ちが何となく分かってきたのです。3年生もぜひ実行してみてください。そして、ウサギやチャボの苦手な子たちも、私みたいに飼育を通して、慣れて欲しいです。また、命のバトンを大切に、また来年も、命のバトンをしっかりと今の2年生にわたしてほしいです。

(4) 有効な教育活動になるための留意点

飼育活動の困難点は、動物の傷病、人への衛生不安、手間の大変さ、休日の世話、アレルギー不安であるが、これらに対して学校の知識だけでは十分な対応はできない。

これに対し、西東京市では地域の獣医師の支援を受けられるようにしている。そのため鳥インフルエンザ問題に対しても教育的な立場からの対応ができてきた。

また、子どもと共に、弱い存在を庇うため、「親爺の会」が冬の飼育箱づくりや、休日の世話など支援活動を始め、それがきっかけで「どんど焼」「防災活動」「池の清掃」など、その後の様々な学校支援活動につながっている。

なにより、平成15年度から飼育を教育課程に位置づけたため飼育学年の保護者の協力と教職員の理解が容易に得られたことが大きい。子どもを育てる有効な動物飼育体験が実現している。